

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 2009. 春

ひたちなか 埋文だより 30



ドングリ拾い 稲作が始まると副食から救荒食、やがては嗜好品へと役割を変えますが、縄文時代には、ドングリなどの堅果果実が主食の位置を占めていたと考えられています。今年も小学1年生がドングリ拾いにやってきました。地面にドングリを見つけて屈み込み、摺り足で移動しながら拾い続けています。授業の一環として、独楽を作るなど教材に利用されるでしょう。児童たちの目に、食べ物としては映っていないようです。

(2008.11.20 中根小学校1年生校外学習)

CONTENTS

第4回企画展 装飾古墳の世界／公開講座「ひたちなか市の考古学」第2回

「出会い、別れ、夢考古学の旅路」第2回 明治大学時代と考古学（川崎純徳）

「骨の考古学」を終えて（小宮 孟）

ひたちなか市内の発掘調査 2008

第3回企画展 フィールドノートの20年

1ケース・ミュージアム 10 鹿角（アントラーズ）

展示資料紹介 大貫のアカニシ 一食料残滓、貝輪素材、容器利用それぞれの貝殻一（鈴木素行・小松崎恵子）

ひたちなか市の遺跡③ 勝田一中学区編 3

歴史の小窓② 私が奉ります

虎塚古墳花便り② フデリンドウ

ほか

第4回企画展



装飾古墳の世界

2009年2月1日(日)－5月10日(日)



ひたちなか市に位置する虎塚古墳は、東日本を代表する装飾古墳です。装飾古墳とは、古墳や横穴墓の埋葬施設の壁面などに、彩色や線刻によつて文様や彫刻の装飾を施したものといいます。今回の企画展では、装飾古墳の写真を数多く展示し、「装飾古墳の世界」を表現してみました。

ここでは、装飾古墳の概要と茨城県の装飾古墳についての解説を掲載します。

装飾古墳の概要

装飾古墳の分類には、石棺系・石障系・壁画系・横穴系の四つがあります。

石棺系は、遺体を安置する石棺の外面や内面に、直弧文や鏡等の文様を浮き彫り、または線刻したものであります。初現は、四世紀中葉の大坂府柏原市安福寺境内にある石棺とされています。石障系は、横穴式石室の奥壁や側壁などの下部に、壁に沿つて立てられた石障と呼ばれる石の板に文様を施したものであります。壁画系は、横穴式石室の壁面に彩色、あるいは線刻で壁画を描いたものです。七世紀には、鳥取県鳥取市梶山古墳や茨城県虎塚古墳など、九州以外の地域にも出現します。横穴系は、崖面を掘り込んで墓室とする横穴墓の壁面に、線刻や浮き彫り、彩色等で壁画を描いたものです。六世紀末頃からは、茨城県や福島県、宮城県にも出現します。

装飾古墳の数は、二〇〇二年の統計によると六五七基が確認されています。古墳や横穴墓は、日本に約三〇万基存在するといわれているので、装飾古墳の割合はわずか〇・一%と、非常に数が

「ひたちなか市の考古学」第二回

二〇〇九年二月二一日から三月十四日の毎週土曜日に、講座「ひたちなか市の考古学2 装飾古墳の世界」を開催しました。講師には、新進気鋭の研究者をお招きして、最新の研究成果をお話しいただきました。また、最終日には、「茨城県の装飾古墳と九州との関係について」の公開座談会を開催し、虎塚古墳の謎に迫りました。

なお、今回の講座の内容については、後日、記録集を刊行する予定です。



月/日	演題	講師
2/21(土)	人文環境論からみた東関東の古墳時代と虎塚古墳	茨城大学人文学部 田中 裕氏
2/28(土)	茨城県の装飾古墳	(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 稻田 健一
3/7(土)	福島の装飾古墳	(財)福島県文化振興事業団 青山 博樹氏
3/14(土)	九州の装飾古墳	熊本県立装飾古墳館 池田 朋生氏
	公開座談会「茨城県の装飾古墳と九州との関係について」	日本考古学会会員 生田目 和利氏・ 池田 朋生氏・稻田 健一

少ないことがわかります。その分布で特に集中しているのは熊本県です。次いで福岡県や宮崎県が多く、九州地方の総数は三七九基と、全体の約六割を占めます。鳥取県や大阪府、千葉県、神奈川県でも多く確認されていますが、彩色のものはほとんどありません。九州地方に次いで彩色のものが多いのは、茨城・福島・宮城県です。このように彩色のある装飾古墳は日本全国に見られるものではなく、九州地方と茨城・福島・宮城県といつた離れた地域に分布しているのが特徴です。

装飾古墳で確認されている色は、赤・黄・白・黒・緑・灰（青）の六色です。使用された顔料は、赤色がベンガラ、黄色が黄土、白色が白土、黒色がマンガン酸化物と炭素、緑色が緑土、青色に近い灰色が灰土です。装飾古墳の多くが、赤色一色です。福岡県嘉穂郡桂川町の王塚古墳は、六色すべての色を使用している唯一の装飾古墳です。虎塚古墳は、赤色と白色の二色です。

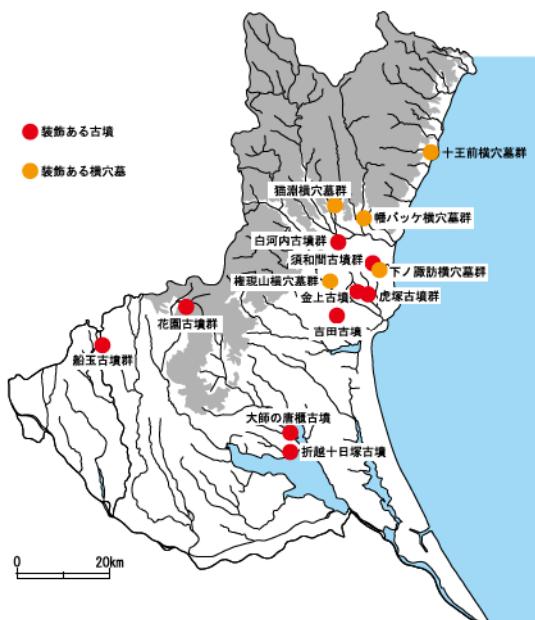
装飾古墳にみられる文様は、初期の石棺系には直弧文・円文が中心です。次の石障系には、直弧文・円文の他に鞠や盾などの武具の文様がみられます。壁画系や横穴系になると、円文や同心円文、三角文などの幾何学文や、武具などがありますが、直弧文はみられなくなります。人物は六世紀の前半頃、騎馬人物や馬、船などは中頃からみられます。文様の特徴としては、丸や三角といった幾何学文様が主体であること、器物の図形や人物・動物の像は、影絵的表現（シルエット）をとる例

が大半であること、人物は目鼻立ちを表現しないことなどがあります。

茨城県の装飾古墳

現在、茨城県内で確認されている装飾古墳は、古墳が九基・横穴墓が九基の計一八基です。この中には、後世に追加された八基と線刻のみの三基の合計一一基とを考えられています。分布は、一地域に集中するのではなく県内各地に散在しています。県内の図文の特徴は、武器・武具類が描かれることです。特に鞠は彩色・線刻両方に例があります。また、幾何学文が多く、福島県のように人物を描いたものがないことも特徴です。

（稻田健二）



茨城大学 人文学部
田中 裕氏



池田 朋生
氏



(財) 福島県文化振興事業団
青山 博樹
氏



「装飾古墳にみられる緑色などの鉄由来の粘土を用いるところは、広いユーラシア大陸の中で日本以外で数箇所だけです。ということは、ものすごく貴重な文化財が日本の中にはあることがあります。」

「装飾古墳だけじゃなくて、集落の様相ですか、そういうものを含めて地域を相対的にみていくことが、新しい歴史を描いていくことにつながっていくのではないかと思います。」

「茨城県でみられる凝灰岩製の横穴式石室のほとんどは、袖石が出る構造なんですね。つまり、九州系石室と呼ばれるものがほとんどなんですね。」

市内遺跡調査速報

一九七九年から、当時の勝

田市において、遺跡に個人住宅などを建てる場合に、部分的に表土を除きながら、住居跡などの遺構があるかどうかを確かめる「試掘調査」を行ったようになります。これが「市内遺跡調査」です。

市内遺跡調査が開始されてから三〇年目にあたる一〇〇八年度は、一覧表に示したような一七件の調査を実施しました。そのうち三反田新堀遺跡と松原遺跡では、見つかった住居跡が、どうしても工事により壊されてしまう位置にあつたため、「試掘調査」の後に、「発掘調査」を実施して、詳しい記録を残しました。

発掘調査が実施された三反田新堀遺跡では、平安時代の住居跡が二軒調査され、竈のなかから焼けて炭になつた穀物が出土しています。また松原遺跡では、古墳時代前期の住居跡が五軒調査され、完全な形の土器などが出土しました。



遺跡の位置

佐々木義則

2008 年度市內遺跡調查一覽表

No.	遺跡名	所在地	調査月	種別	調査内容
1	みたんだいしんぼり 三反田新堀遺跡	三反田	4月	試掘	溝1条・ピット3基を確認。石器剥片、須恵器、土師器、蔽石などが出土。
2	三反田新堀遺跡	三反田	5月	試掘	溝2条・ピット1基を確認。縄文式土器、弥生式土器、須恵器、土師器、蔽石、焼拂などが出土。
3	ながさなくぼ 長砂久保遺跡	長砂	5月	試掘	遺構・遺物なし
4	にゅうどうこふんぐん 入道古墳群	磯崎町	6月	試掘	溝1条を確認。須恵器、土師器などが出土。
5	にしゃつ 西谷津遺跡	馬渡	6月	試掘	土器小片が出土。
6	三反田新堀遺跡	三反田	7月	試掘	住居跡2基(平安)、溝1条を確認。土師器・須恵器が出土。
7	ほりぐち 堀口遺跡	堀口	7月	試掘	住居跡2基(奈良以後1、時期不明1)、溝1条を確認。縄文式土器、手づくね土器(古墳)、須恵器壺(平安)、土師器小皿(平安)、須恵器長頸瓶・盤、土師器などが出土。
8	三反田新堀遺跡	三反田	8月	本調査	住居跡2基(平安)、溝2条を調査。須恵器壺・有台杯・有台盤(平安)、須恵器蓋・壺・甕、炭化種実、寵物強材(泥岩)、土師器などが出土。
9	まつばら 松原遺跡	田彦	12月	試掘	住居跡5基(古墳1、時期不明4)、溝2条。不明遺構1基、土坑1基、ピット1基を確認。弥生式土器、近世陶磁器、土師器などが出土。
10	くろばかま 黒袴遺跡	津田	1月	試掘	溝1条を確認。弥生式土器、土師器などが出土。
11	三反田新堀遺跡	三反田	2月	試掘	土師器・須恵器片が出土。
12	まわりけにわせいかく 馬渡埴輪製作遺跡	馬渡	2月	試掘	遺構・遺物なし。
13	ひらいそみやうえ 平磯宮上遺跡	平磯町	2月	試掘	溝2条を確認。中世土器などが出土。
14	堀口遺跡	堀口	3月	試掘	住居跡25基(弥生時代1、古墳時代9、奈良・平安時代2、時期不明13)、土坑3基(古墳時代2、時期不明1)、ピット2基。溝1条を確認。弥生式土器、土師器壺(古墳前期)、土師器高杯・甕(古墳中期)、須恵器杯(奈良)、土師器壺(平安)、内耳土鍋(中世)、須恵器甕、土玉、蔽石、刀子、土師器などが出土。
15	かみばば 上馬場遺跡	津田	3月	試掘	遺構・遺物なし。
16	いそみこふんぐん 磯崎古墳群	磯崎町	3月	試掘	遺構・遺物なし。
17	三反田新堀遺跡	三反田	3月	試掘	遺構・遺物なし。

松原遺跡の発掘調査

松原遺跡の発掘調査 松原遺跡は、ひたちなか市の西部の田彦地区に所在する弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡です。今回は宅地造成にともなって発掘調査を実施しました。その結果、約 300 m² の調査範囲から、住居跡 5 基・溝跡 2 条、土坑 1 基が検出されました。住居跡の年代は、いずれも古墳時代の前期（4 世紀）に位置付けられるもので、同時期の住居跡はひたちなか市内では検出例の少ない貴重なものになります。いずれの住居跡も長い期間にわたって居住がなされた痕跡が見当たらず、集落は短い期間しか存続しなかったようです。

田彦地区は大きな川や谷などがなく、水田耕作に向かない地形であり、那珂川沿いの武田や堀口、三反田地区のような数百軒に上る大規模集落は、現在のところ発見されていません。しかし今回発見された集落は、器台（きだい、土器の置き台）や実用的ではない小型の壺など、通常とは異なる遺物が多く出土しており、規模は小さいながら大変特徴的なものです。（石井 篤）



松原遺跡出土の器台

第3回企画展 フィールドノートの20年

の再現等を行いました。また、公社が実施してきた発掘調査の成果もあわせて展示了しました。期間中に、『フィールドノート』のバックナンバーの限定配布を実施したところ、第一号等は配布開始一時



「ファイールドノート」は、財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社が発掘調査事業を開始した一九八八年度から二〇〇七年度までの二〇年間、毎年一号ずつ発行した年報です。その内容は、当社が実施した武田遺跡群・向野遺跡群・船窪遺跡群・鷹ノ巣遺跡の調査成果の速報を中心とし、それを市民にわかりやすく伝える目的で発行してきました。

間ほどで品切れとなり好評を得ました。

ワークショップの開催

一二月一三日には『フィールドノート』のワークショップを開催しました。午前は、さかい氏による『フィールドノート』作成の話。午後は、フィールドに出て遺跡を中心に散策し、センター周辺のマップ作りを行いました。



私が奉ります

写真の遺物は、ひたちなか市武田の石高（いしだか）遺跡から出土した平安時代前半の須恵器杯（すえきつき）という器を、底から見たところです。ちょっと見えづらいですが底に墨で文字が書かれています。奈良時代から平安時代ごろの土器には、こうした「墨書き土器（ぼくしよどぎき）」をときどき見ることができます。なんと書いてあるのでしょうか？ 国立歴史民俗博物館の平川南先生にみていただいたところ、「丈部□賀」（□は文字不明）であると教えてくださいました。「丈部」は「はせつかべ」という氏族の名前なので、どうやら人の名前が書かれていたようです。平川先生の研究によれば、神に食べ物をささげた土器に、「私が奉ります」という意味を込めて名前を書いたようです。それは当時、国へ納めた貢物（みつぎもの）に、「私が奉ります」という意味で名前を書いていたのと同じやうです。古代ひたちなかの村に住んでいた人々は、このように文字を利用したのでした。

(佐々木義則)

参考文献『武田石高遺跡 奈良・平安時代編』

鹿角の基礎知識 鹿の雄は角を持ち、それは「春に落ちて・夏に成長し・秋に完成する」というサイクルを毎年繰り返します。自然に落ちた角（落角）は、頭蓋骨との接合部分（角座）の裏側が丸く、その模様が菊の花に例えられます。この特徴から、角座部分が出土すれば、その角が自然に落ちたものか、頭蓋から切り離したものかがわかります。また、角座に角座骨（雄の頭蓋にある角と接合する部分の骨）がついているか否かで、採取したおおよその季節がわかります。



貝塚出土の鹿角

縄文前期の小川貝塚から出 こがわ

この展示では、「ふるさと考古学（⑦骨の考古学）」の参考展示として、市内の貝塚から出土した鹿角と、それを素材に製作された道具「角器」（釣竿頭）

鹿角と、それを素材に製作された道具「角器」(釣り針・鉛・ヤス・鏃)を公開しました。「鹿角の基礎知識」「貝塚について」「角器のいろいろ」「釣り針の作り方」という四つのテーマを設定した展示のうち、「鹿角の基礎知識」から見た貝塚出土の鹿角について紹介します。

土した鹿角七二点のうち、角座を含むものは約半数の三七点。更に、その約半数一八点が落角でした。落角ではないもののうち、角座骨に切断痕があるもの・そこで切断されたものが合わせて七点ありました。縄文晚期の大田房貝塚だいたいぼうから出土した鹿角は一四一点。角座部分は一五点、うち四点が落角でした。小川貝塚と違い、角座を含まない部分の鹿角はほとんどに切断痕があるため、元の個体数はわかりませんが、切断の結果として鹿角の数が多くみえるのでしょうか。落角に計上した鹿角には、切断痕が全くない完全な状態の右角二点を含みます。



「ハニワのおまつり」菊池早央里（小3）



「緑と風の戦士」高橋慶太（小3）

杉の子絵画教室写生会の作品 (2008.4.8)

『骨の考古学』を終えて



縄文時代の人たちの生活は、どんなだったのだろうか? —と考える時、私たちの多くが、狩りや漁をして暮らす不安定な生活をイメージするはずです。食の安全やエネルギー問題などを契機に、資源の限られた島国に住む危うさを思い知らされたばかりですが、私たちと縄文人の生活は、どこがどのように違うのか? 遺跡を調べることで、そのことに具体的に迫れるとしたら、考古学はもつと身近な科学になるかも知れません。

実は、私たちがすぐに思いつく縄文時代のイメージは、明治時代から戦前までにつくられた古い先人観—コメ作りが始まる以前は野蛮で貧困の時代だつたはず—という思い込みに誘導されがちです。ご存知のように、戦後になつて沢山の遺跡が発掘され、この時代のイメージを覆す新しい事実がつぎつぎと発見されました。日常生活にする部分の書き換えはあまり進みません。

それには大きく二つの理由が考えられます。一つは、当時の経済活動の具体的な証拠となるのは、当時の人たちが手に入れた動植物です。しかし、酸性土壌が卓越する日本列島では頑丈な骨もすぐに分解してしまって、長い年月をへた遺跡には証拠が残らないのです。貝塚からは沢山の骨が出しますが、これは大量の貝殻に含まれる炭酸カルシウムの働きによって、運よく分解をまぬがれたものです。また、貝塚は海岸近くのムラにわずかに作られた特殊な遺跡なので、縄文時代の遺跡全体からみれば数が少なく、地理的にも偏っています。

もう一つの理由は、骨が記録しているメッセージを読みとる専門の研究者が少ないとあります。「物は語らず。ただ人をして語らしむのみ」の例えどおり、出土した骨がどんな動物のどの部分で、動物の年齢や性、体重やサイズはどのくらいだつたか?などの疑問は、縄文人がどのような獲物を狙つて狩りや漁をしたかを考えるうえでの最も基本的な情報です。これらの情報を得るには、年齢や性などが異なる現生動物の骨格標本を種ごとに揃えて、出土した骨と比較しなければなりません。考古学が文科系に属している日本では、標本や解剖学・生態学などに関する知識を持つた研究者を持続的に育成することが難しいのです。

今回は催しに集まつた小学生たちと一緒に、市内にある約六〇〇〇年前の貝塚から発掘した動物の骨の分類に挑戦してみました。比較用の骨格標本はスタッフの協力でイノシシとシカの現生

標本を借りていただきました。小学生は好奇心が強く、脳も柔らかいので、限られた時間内で当時のイノシシとシカのサイズが現生のものよりはあるかに大きいこと、また、貝塚に残っている骨の部位に強い偏りがあることなどをつきとめました。最も驚いたことは、何故そうなったのだろうか?と私が投げかけた疑問に、小学生たちから活発に手があがり、返ってきた答えの中にプロ顔負けの解釈がいくつも含まれていたことです。科学は豊かな発想から生まれます。このような若い力が今後もどんどん育つて欲しいものです。



「ふるさと考古学」受講生とともに (2008.10.28)

中學区編(②)

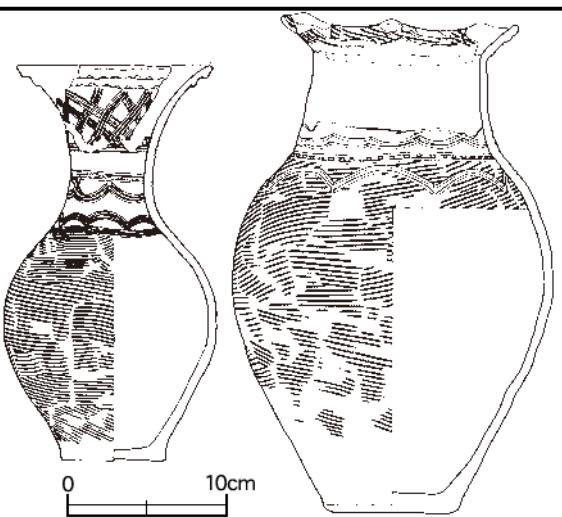


約 800 年前

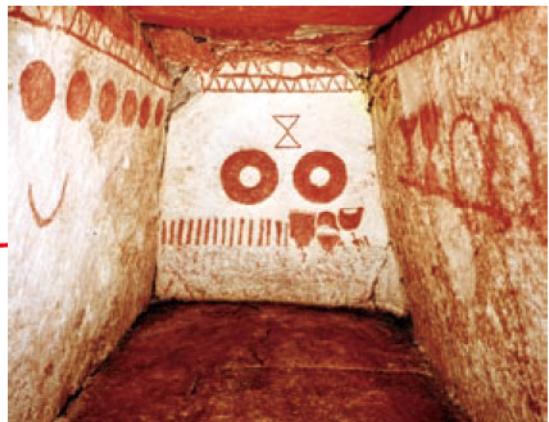
平安時代

0

1 km



東中根の台地上には、堂山・大和田・清水遺跡など弥生時代後期の集落跡が点在しています。これらの遺跡から出土した土器は「東中根式」と呼ばれています。上の図は、1928年に堂山遺跡から発見され、藤本弥城氏が保管していた土器の一部です。



虎塚古墳の死者を埋葬する部屋（石室）には、上の写真のように、赤い色で丸や三角等の文様が描かれています。このように絵が描かれている古墳は非常に珍しく、茨城県では 18 基しか見つかっていません。



十五郎穴横穴墓群は、崖面を横に掘り込んで造ったお墓です。今までに 181 基が見つかっていますが、全体では 300 基以上になります。

勝田一中学区には、現在、83の遺跡がみつかっています。この数は市内でもっとも多い数です。今回紹介する中根小・長堀小学校区は、中丸川の北側の地域で、37の遺跡があります。この中には、縄文時代の君ヶ台貝塚、弥生時代の東中根遺跡群、古墳時代の笠谷古墳群や虎塚古墳、古代の十五郎穴横穴墓群といった、ひたちなか市の各時代の有名な遺跡が存在しています。

遺跡の発掘調査は1950年代から行われており、2007年までに50回実施されています。重要な調査としては、1973年の虎塚古墳の壁画発見があります。壁画発見時には、1日で1万人を超える見学者が訪れました。また、後野遺跡から出土した石器と土器は、非常に貴重なもので、茨城県の指定文化財になっています。虎塚古墳は、国指定史跡、十五郎穴横穴墓群は県指定史跡になっています。

2007年までに発掘調査された住居跡の数	
中根地区	37基
長堀地区	
合計	

ひたちなか市の遺跡3（勝田一中）



後野遺跡は、旧石器時代から縄文時代への過渡期にあたる時代の遺跡です。東北地方が原産の貞岩で製作された石器に、日本最古の土器のひとつ「無文土器」が伴います。



宿ノ内遺跡からは、遺体を火葬にして骨を入れた壺が出土しています。時代は平安時代です。このような骨壺は、市内で5遺跡からしか見つかっていません。



君ヶ台貝塚は、縄文時代の中～後で、斜面に積もった断面の様子です。厚さは約5m

2007年までに発掘調査された遺跡（地図上の●印）

中根地区：虎塚古墳群、十五郎穴横穴墓群、館出遺跡、指渕遺跡、東中根遺跡群、野沢前遺跡、北谷遺跡、北谷北遺跡、中根中区古墳群、下原遺跡、

君ヶ台遺跡、君ヶ台貝塚、後野遺跡

長堀地区：柴田遺跡、枯松戸遺跡、小砂遺跡、宿ノ内遺跡、西中根遺跡、殿塚古墳群

約12000年前

旧石器時代

縄文時代

約2200年前

弥生時代

約1800年前

古墳時代

奈良・

明治大学では入学試験のあと面接があり、私は後藤守一先生の面接を受けた。先生は調査書と試験結果を見ながら意地の悪い質問を続けた。「調査書は本当に担任の先生が書いたの?」ではじまって、「読書傾向、趣味などと進み、最後に「他に受けていた大学は?」と聞く。大学名をあげると全部合格したら、どこに行くのかと言う。私も多少はムツとして来る。「明治には入りません」と答える。すると先生は「学問はどこでも出来る。僕も君も学徒の一人。これから君の活躍に期待している。しっかりがんばってほしい」と諭すように言われた。会場をあとにしながら偉い先生がいるなど感じたのである。志望校は不合格となり明大へ進む。

入学後のガイダンスでは若く、小柄だがエネルギッシュな先生が担当され、テキパキと歯切れのよい語り口が印象に残った。大塚初重先生である。明大に進んでも志望校再挑戦を考えていた。毎日、英語や数学の問題を解いていた。

八月ごろ東京水産大の水谷宏君と友達になる。彼は水産業の将来の夢として、日本中の海を魚の養殖場にするのだと言う。彼には大変触発される

ことが多く、一緒に各地の海に出掛けた。台風一過の鎌倉の海岸での貝の採集や深夜の銚子港でトロール船の入港を待つたこともあった。トロール船が運んでくるゴミは珍しい貝類の宝の山であつたのだ。

秋に大学再チャレンジをやめ明大を続けることにした。そして千葉や茨城の貝塚を歩き続けた。貝塚の貝と現海岸の貝との間に大きな違いがあることが分かり、これを卒業論文のテーマにすることを決めた。

卒業後の進路については悩んだ。公務員か新聞社と決めた。公務員は行政上級甲種ときめ二年次の終りごろから勉強にかかつたが不合格。しかし、某新聞社から声がかかった。一時は入社しようと考えたが、東京に戻れる可能性は薄いと聞いて辞退した。結局、教職の道を選んだ。長期休業が魅力であったのだ。

卒業は昭和二七年、帰郷に当つて研究室に杉原莊介先生を訪ねると「学校は遊びに行く所ではないぞ。三年間は考古学を忘れて学校の仕事一筋でやれよ」と言られた。別に遊んでいたわけではなかつたが、あまり考古学の勉強はしなかつた。僅かに佐賀県の多久三年山遺跡や埼玉県五領遺跡の調査に参加した程度であつた。かくして、アルバイトに明けくれた四年間が終つた。



1960(昭和35)年五領遺跡の調査(後列左が工楽善通氏、右が外山和夫氏、中列左が川崎、中央は小林三郎氏)



川崎 純徳

卒業は昭和二七年、帰郷に当つて研究室に杉原莊介先生を訪ねると「学校は遊びに行く所ではないぞ。三年間は考古学を忘れて学校の仕事一筋でやれよ」と言られた。別に遊んでいたわけではなかつたが、あまり考古学の勉強はしなかつた。僅かに佐賀県の多久三年山遺跡や埼玉県五領遺跡の調査に参加した程度であつた。かくして、アルバイトに明けくれた四年間が終つた。

* 川崎純徳氏のプロフィールは、連載第一回(『埋文だより』第二九号)に掲載しております。

おおぬき 大貫のアカニシ

— 食料残滓、貝輪素材、容器利用それぞれの貝殻 —

鈴木 素行・小松崎 恵子



稻敷市広畠貝塚に露出するアカニシの貝殻
(1999.3.26撮影)

市内にある三反田蜆塚貝塚などの貝塚は、縄文時代の人々が食べた貝の殻が堆積した痕跡として説明されます。貝殻の大部分が食べ殻であることに間違いはありませんが、食用でない貝殻も混じります。アカニシは、「貝輪」と呼ばれる腕輪の素材として、また注ぎ口の付いた容器として利用するために、貝殻も採集されていました。巻貝を真似た土器の起源は、容器としての貝殻の利用にあったことが考えられます。

1はじめに

大洗町大貫に在り「大貫貝塚」とも呼ばれた大貫落神貝塚の遺物が、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター（以下「センター」と表記）に「藤本弥城先史資料」として所蔵されている。これは、一九六九～一九七三年に藤本弥城・武氏が発掘した資料である。一九八〇年の藤本氏の報告には、「超大型級」のものが二個体出土し、その殻口縁が研磨され、土器代りに容器として使用されたであろう」という、アカニシの貝殻が写真で掲載された。アカニシは、鹹水性の腹足綱いわゆる巻貝の一種で、殻の内側が赤いことからその名がある。本稿では、大貫落神貝塚のアカニシを再報告するとともに、縄文時代の那珂川下流域におけるアカニシの利用について考察する。

2 食料残滓としてのアカニシ

那珂川下流域のほとんどの貝塚が汽水性のヤマトシジミを主体とするのに対し、縄文時代に内海であった霞ヶ浦の沿岸域には、ハマグリ等の鹹水性の貝を主体とした貝塚が多い。貝種組成におけるアカニシの割合も、行方市於下貝塚では混貝土層C地点において約一〇%、土浦市上高津貝塚E16C②地点のコラムサンプルでは、最も多いサンプルで三%という報告がある。主体となつて貝層を形成するほどではないものの、その貝殻は食料として利用とされた残滓と推察される。食用とされたアカニシの標準的な大きさを探るため、美浦村陸平貝塚の中期末葉の貝層から検

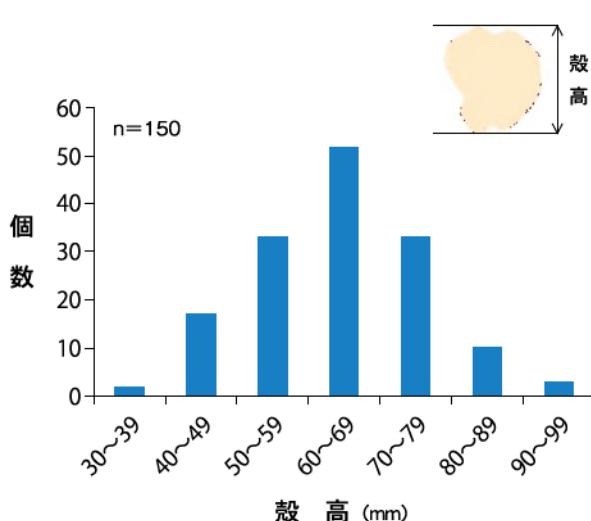


図1 陸平貝塚のアカニシの殻高分布

出されたアカニシ一五〇個体を計測したところ、殻高は三七～九五mmの範囲にあり、六〇～六九mmのものが最多であるという結果を得た（図1）。この知見をもとにセンター所蔵のアカニシを観察したところ、九〇mm以上の殻には、長い間波に洗われることで磨滅が進む「水磨」や他の生物による「捕食痕」が見られ、すべて死殻であることが確認された。また、それ以下の大きさのものからは、生貝を採集したと推察できるアカニシを七点抽出することができた。その七点は、前期前葉の水戸市大串貝塚と中期中葉の大洗町吹上貝塚の採集資料である。殻高の計測値は最大八八mm、最小三八mm。那珂川下流域においても、少ないながらアカニシが食料として利用されていたことが明らかである。

が考えられる。

3 貝輪素材としてのアカニシ

食料としては利用できないアカニシの死殻が採集された理由の一つとして、縄文時代にはアカニシの貝殻を素材に貝輪が製作されたことが知られている。那珂川下流域においては、吹上貝塚から検出された二点の報告がある（図2の1～3）。後期前葉のものであろうか、しかし法量についても詳しい記載はない。未完成品と推定される資料は、セントリー所蔵の吹上貝塚に一点（図2の4）、ひたちなか市三反田貝塚に一点（図2の5）が報告されている。ともに貝殻の螺塔が除去され、殻口の外縁近くと殻軸とが環状に残る。表面に研磨の痕跡は認められず、敲打による穿孔と成形がほぼ終了した段階にある。これらは中期後葉～後期前葉のもの。計測値は、1が長さ九三mm・幅七六mm、2が長さ九四mm・幅六四mm。素材の貝殻は殻高が一二〇～一三〇mmほどと推定される。特に1の殻表は水磨による摩耗が進行しており、殻軸には捕食痕も見られることから、生貝ではなく死殻を素材としたことが確実である。現在の鹿島灘の海岸で採集されるアカニシの貝殻には、内側に赤色の彩を残しつつ、破損の進行したもののが見られる（図3の1）。破損した状態の死殻も、ひたちなか市上ノ内貝塚から検出されており（図2の6・7）、貝輪の素材としての条件を満たしていれば、採集されたことが考えられるのである。

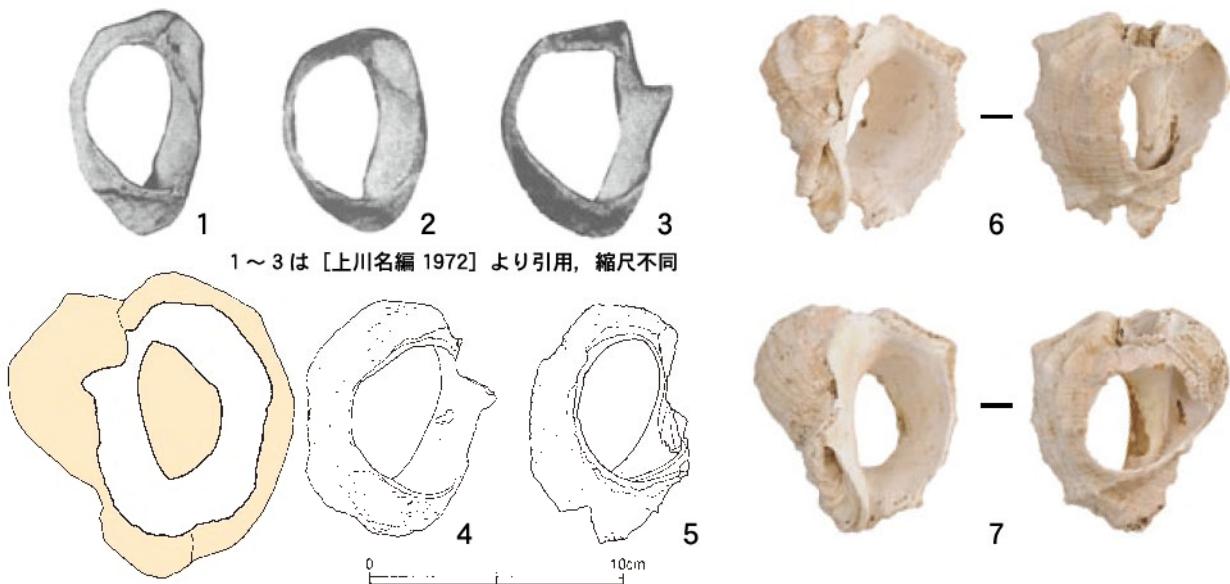


図2 アカニシ製の貝輪、未成品、素材 (1～4：吹上貝塚、5：三反田貝塚、6-7：上ノ内貝塚)

藤本弥城氏により「超大型級」で「その殻口縁が研磨され」と報告されたアカニシ一点は、水管部分と一方の殻口が若干破損しているほかは完形である（図4）。どちらもアカニシ特有の色が抜け、手に持った時ずつしりと重さを感じるほどの重量感である。

1は殻高一六〇mm、殻径一二八mm、重さ七四三g。水管部分と殻口が若干破損している。この破損した殻口が研磨されたよう滑らかになっているが、これは水磨によるものである。その磨滅は貝殻全体に及び、外側の突起部分も磨滅して丸味を帯びている。殻口付近には捕食痕も見られる。加工は施されていない。2は殻高一六〇mm、殻径

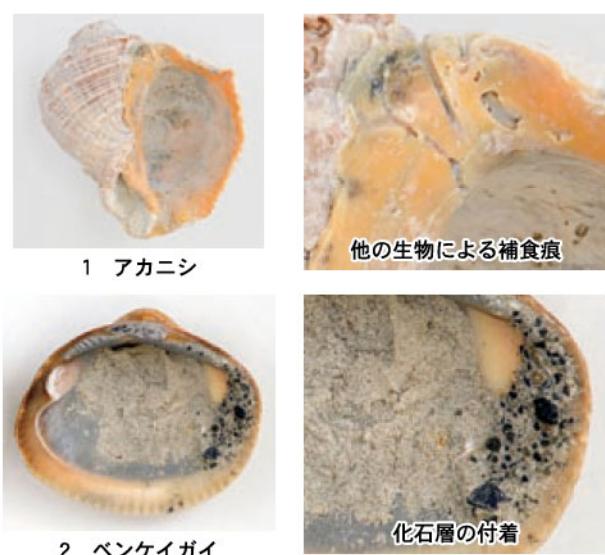


図3 鹿島灘沿岸採集のアカニシとベンケイガイ

4 容器利用としてのアカニシ



図4 大貫落神貝塚から出土したアカニシの容器

一三六哩、重さ七六五g。やはり水管部分が破損している。1ほどではないが殻外側には水磨による磨滅が見られる。加工は施されていない。

二つの貝殻は、水磨による磨滅が見られることから、死殻を採集したものと推定される。貝輪の素材として利用するには大き過ぎることから、藤本氏と同じく容器としての利用を考えたい。ちなみに容量としては、口まで満たした状態で四八〇cc・四五五ccであった。置いた状態では若干殻口が傾くため、三五〇cc・三一五ccと容量が減るが、安定した状態で置くことができる。時期は、同じ層位から検出された土器により、後期前葉の堀之内式の時期に廃棄されたものと考えられる。

5 貝殻の由来

一九五九年、斎藤登志雄氏は、いわゆる「繩文海進」に伴い堆積したと推定される那珂川河口

付近の自然貝層を「田中層」として報告し、その貝種の一つにアカニシを記載した。一九九二～一九九三年頃の工事で中丸川に架かる柳沢橋の付近から掘り出されたのも「田中層」に相当する自然貝層であり、この時に藤本武氏もアカニシを採集している。但し、個体数は僅かに一点であり、一九九九年に柳沢橋付近の中丸川底から採取した自然貝層の資料にはアカニシが含まれていない。繩文時代の那珂川下流域にアカニシの生息は認められるものの個体数は少なく、その時期も限られていたと見られる。中丸川底採取のアカニシは殻高六〇～七〇mmほど。貝塚から検出される

個体数の少なさ、貝殻の計測値も、食料としてのアカニシンの採集地が、「縄文海進」により形成された那珂川河口付近の内湾にあつたことを推定させる。

一方、貝輪素材および容器利用と推定されるアカニシのほとんどには水磨痕あるいは捕食痕が認められることから、食料として持ち込んだ残滓を利用したのではなく、目的に応じた大きさの貝殻が採集されてきたものと考えられた。特に容器利用の貝殻の大きさは、縄文時代のアカニシでなく、第四紀「成田層」の貝化石によく一致する。本来は化石層中に包含されていたものが洗い出されたとすれば、採集地には当時の鹿島灘沿岸を想定しておきたい。現在の海岸で採集されるベンケイガイには、内側に化石層が付着したままのものも見られるのである（図3の2）。

縄文時代には土を素材として、様々なものが造形されている。巻貝もその一つである。しかし他の土製品と異なるところは、「容器」としての利用を考えることができるということである。

卷貝形土製品が初めて報告されたのは、一九六〇年の新潟県上山遺跡である。その後、少ないながらも徐々に増え、現在のところ北海道、秋田・岩手・宮城・山形・新潟県などで一〇遺跡一二三例が報告されている。完形及びそれに近いものは五例。破片になると形態が判然としないところから、報告されていない例も多いと思われる。ま

实物大のアカニシの貝殻（図4の2）

以南と記載されており、その地域との関連が考えられている。アカニシを模して作られたと推定される土製品は、現在のところ報告されていない。

二〇〇三年の北海道キウス4遺跡の報告で、阿

部明義氏が土器の検討と併せて巻貝形土器の集成と検討を行い、また二〇〇八年には長田友也氏が、新潟県奥三面遺跡群から出土した巻貝形土器の報告と併せて集成を行っている。それによると、今まで報告されている巻貝形土製品・土器のほとんどが、後期中葉から後葉の土器に伴つており、その編年をもとに時期差を考えることができるという。古いものは貝殻を忠実に模しており、丁寧な作りである（図5-2）。それが新しくなるに従つて、殻頂部を模した装飾などに貝殻の痕跡を残しつつも安定した底部が作られ、貝殻の「形」よりも「注ぐ」という機能に重点を移した片口土器に変化していくことがわかる（図5-1）。

7 おわりに

那珂川下流域においてアカニシは、縄文時代の前・中期には少ないながらも食料として利用された。中・後期には、大型の貝殻が採集され、これを素材として貝輪が製作された。後期には、超大型の容器については、原産地から離れた地域において、これを模倣した形状の土器が製作されるようになる。貝殻は「土器代り」ではなく、「貝殻代り」となる土器が成立するのである。



図5-1 奥三面遺跡群元屋敷遺跡出土の巻貝形土器
(上) ([新潟県立歴史博物館 2002] より引用)



図5-2 新潟県上山遺跡出土の巻貝形土製品
(右) ([東京国立博物館 1988] より引用)

資料の紹介にあたり、遠藤好氏・黒住耐二氏・国府田良樹氏・中村哲也氏・藤本武氏・矢野徳也氏にご指導とお世話をいただいた。心より感謝申し上げる。

参考文献

- 阿部明義二〇〇三「縄文時代後期後半の微隆起線土器について」『キウス4遺跡（10）』北海道埋蔵文化財センター／長田友也二〇〇八「元屋敷遺跡出土の巻貝形土器について」『三面川流域の考古学』第六号 奥三面を考える会／上川名昭編一九七一「大洗町教育委員会／斎藤登志雄他一九九一『土地分類基本調査 磯浜・鉢田』茨城県農地部農地計画課／鈴木素行二〇〇〇「柳沢のカキ（前編）」『常総台地』第一五号／鈴木素行二〇〇三「柳沢のカキ（中編）」『茨城県考古学協会誌』第一五号／東京国立博物館一九八八『特別展日本の考古学』／波部忠重・小菅貞男『標準原色図鑑全集3 貝』保育社／藤本弥城一九八〇『那珂川下流の石器時代研究II』／新潟県立歴史博物館二〇〇二『奥三面展』／山崎健二〇〇六『渥美半島における貝輪素材の獲得』『考古学ジャーナル』五四三号



成長と貝輪 小松崎湖衣さん(1歳3箇月)
孔の長軸 35mm の貝輪はまだ楽に装着できます。
(『埋文だより』第28号の続報)

文 埋 セ ン タ ー の 日々 2008

後期

ふれやか考古学⑥「壁画の考古
学」(講師・堀川武氏)→

の文字瓦】佐野中学校2年生
職場体験→

10月
「大阪府立近つ飛鳥博物館へ資
料貸出【乳飲み子を抱く埴輪(レフ
リカ)】、8せつらつボウル水曜
会見学、9勝田第三中学校1年
生見学、18ふれやか考古学⑦
「壇の都古跡」(講師・小畠桂氏)
「ワンケース・ミュージアム10
「鹿角(アヘントース)」開始、
22小美玉市玉里史料館へ資料
貸出【差波の土器・貝輪】、24那
珂市立普谷西小学校6年生見学
「虎塚古墳点検」、29勝田第三
中学校へ資料貸出【VT「ひたち
なか市の歴史」「甦る沢田遺跡」】、
31中根小学校2年生見学、「理
文だよっ」第29号発行

14茨城高等学校歴史部見学、
潮来市悠々塾生見学、15ふれ
やか考古学⑨「ハイアルド探検」
(講師・矢野徳也氏)→



29取手市緑水会見学、30新潟
県南魚沼市一行見学

12月
3-13松原遺跡試掘調査、4-11
反田小学校へ資料貸出【反田
観塚の土偶写真】、7ふれやか
考古学⑫「まほあす樂っこ都古跡」
(講師・せかじひらい氏)→

下関考古博物館より遺物返却
「13第3回企画展関連ワーク
シップ開催」、14第3回企画
展「フィールドノートの20年」
終了、17-19大島中学校2年
生職場体験→



虎塚古墳周辺に咲くフデリンゴドウ(2007.4.27)

11月
「第3回企画展「フィールド
ノートの20年」開始、5田彦小
学校3年生見学、6-9-13-
16虎塚一般公開、6東海村の
環境調べ隊保護者会見学、7つ
くはみらい市歴史教室見学、ひ
たちなか市教育委員会見学、9
委員会) 資料閲覧と撮影【原の寺

24ふれやか考古学⑪「籠の考
古学」(講師・谷川栄子氏)
18大阪府立近つ飛鳥博物館よ
り遺物返却、27ワンケース
ミュージアム10「鹿角(アヘト
ス)」終了

虎塚古墳
花便り

2 フデリンゴドウ

*お願い ここで紹介している植物は、非常に
数が少なく、デリケートなものばかりです。み
なさんで楽しめるよう、採つたりしないように
お願ひします。

